

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 5 月 18 日現在

機関番号：34428

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26870740

研究課題名(和文) 陰陽道の地域的展開および仏教・神祇との習合に関する研究

研究課題名(英文) Study on regional development of Onyoudou and study on syncretism of Shinto and Buddhism

研究代表者

赤澤 春彦 (Akazawa, Haruhiko)

摂南大学・外国語学部・講師

研究者番号：90710559

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は日本中近世社会における宗教の習合過程を歴史学・宗教学の視角から考察するものである。研究対象を宇佐八幡宮の陰陽師に定め、史料調査や現地調査を行い、その具体像を明らかにした。宇佐の陰陽師は12世紀末から19世紀まで宇佐社神職の一員として活動が確認できる。神社の諸儀式への参仕、呪術などに関わり、屋敷や所領も保有していた。さらに、所領の地は近世初頭に陰陽師が集住する村となり、九州北部地域における陰陽道の展開に大きな影響を与えたことも明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：This study considers the process of syncretism of Shinto and Buddhism in the medieval and the early modern period of Japan from the perspective of historical studies and religious studies. The subject of the study is Onmyouji of Usa Hachimangu Shrine. As a result of historical research and field survey, the real image of Onmyouji was revealed. Onmyouji of Usa Hachimangu Shrine was active from the end of the 12th century until the 19th century. Onmyouji participated in various rituals of the shrine, engaged in magic, possessed a mansion and territory. In addition, the territory became a village where Onmyouji lives and gave a great influence on the development of Onmyoudou in the Northern Kyushu region.

研究分野：日本中世史

キーワード：陰陽道 陰陽師 宇佐八幡宮 神仏習合 地域社会

### 1. 研究開始当初の背景

日本宗教史は1975年に黒田俊雄が提唱した顕密体制論によって大きく展開を遂げた。従来の教義史・教団史だけでなく、政治史・経済史・社会史・技術史・都市史・建築史・文化史など多様な分野との接続が可能となった。これをうけて、1980年代以降、日本中世の寺院史研究はめざましい成果が蓄積されてきた。しかし、顕密体制論には残された課題も多い。大きな論点としては、東アジア世界的視角からの考察、東国社会との関係、中世後期への説明、神祇など仏教や寺院以外の宗教との関係の4点が挙げられている(黒田俊雄『増補新版 王法と仏法』法蔵館、2001、平雅行解題)。とりわけ については神祇研究は近年盛んになってきているが、東アジア宗教世界を考える上で重要な道教や陰陽道については大幅に立ち遅れているのが現状である。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、日本中近世社会において複数の宗教が習合する歴史的・宗教的過程を明らかにすることである。またその展開上には寺院史や神祇史に収斂されない包括的な日本宗教史像を構築することを視野に入れている。

本研究では東アジア世界において大きな影響を持ちながら仏教史・神祇史に比べて研究が手薄な道教・陰陽道を分析視角に用いる。より具体的な目的としては、仏教、神祇、陰陽道といった複数の宗教・思想が、寺院・神社を起点として相互に習合しあう歴史的・宗教的過程を明らかにする、地域社会に根を張る陰陽師の活動を歴史資料や民俗資料を用いて具体的に明らかにし、古代中世の国家的陰陽道と近世の民間陰陽道の断絶・連続の問題を解明する、これらを東アジアの宗教世界の中に位置づける以上の3点を掲げる。

### 3. 研究の方法

本研究の目的を達成するため、(1)地域寺社に属して活動を展開する陰陽師の実態を史料に基づき具体的に明らかにする、(2)寺社を媒介とする陰陽道思想の地域的展開を考察する、以上2点の課題を設定する。

具体的には、宇佐八幡宮の神職制度における陰陽師の位置づけ、宇佐の神事・仏事における陰陽師の役割、宇佐の陰陽師の屋敷および所領、領主としての実態、

近世以降の陰陽師の存在形態、宇佐および周辺地域における陰陽道に関わる民俗行事、民間伝承、以上5点を中心に調査する。その上で地域社会における仏教、神祇、陰陽道の宗教・思想上の習合について考察する。

研究方法は、宇佐八幡宮の神職の系譜に

連なる家の文書、宇佐八幡宮の縁起や仏事・神事の儀式次第書などを調査し、あわせて景観調査や聞き取り調査を行う。日前国懸宮と善教寺については史料集、和歌山県立文書館などを中心に調査を行う。

### 4. 研究成果

(1)1年目にあたる26年度は宇佐八幡宮における陰陽道・陰陽師の実態を把握するため、すでに刊行されている史料集を調査して、関係文書の収集にあたった。『大分県史料』(大分県史料刊行会)と『宇佐神宮史』(宇佐神宮庁)を閲覧し、「到津文書」「永弘文書」「小山田文書」「益永文書」「矢野文書」「北和介文書」「辛嶋文書」「宮師文書」「宮成文書」「薦神社文書」「今永文書」「広崎文書」「宇佐宮現記」「宇佐郡文書」から、計162点の関係史料を検出できた。このように多数の家文書に陰陽道・陰陽師関連の史料を見出すことができたのは大きな収穫であった。なお、このうち「到津文書」「永弘文書」「宮師文書」「益永文書」については、東京大学史料編纂所に架蔵されている影寫本及び収蔵されている写真帳から校合を行った。次に『神道大系 卷四十七宇佐』(神道大系編纂会、1989年)に所収されている「宇佐宮寺年中行事一具勤行次第」「宇佐宮年中行事案」「宇佐宮寺年中月並神事」「宇佐宮寺造営并神事法会再興日記」「宇佐宮齋会式」などから宇佐の神事、仏事、年中行事の概要を把握し、最も重要な行事の1つである放生会の現地調査を行い、関係者から聞き取り調査を行った。現在では陰陽師の存在は認められなかった。また、大分県立図書館、宇佐市立図書館において関連論文などの文献収集にあたった。

これら収集した史料をもとに、本年度の目的である、宇佐八幡宮の神職制度における陰陽師の位置、宇佐八幡宮の神事・仏事における陰陽師の役割、宇佐の陰陽師の領主としての実態について考察した。このほか、本年度の成果として、宇佐を含む西国地域における陰陽道の展開についてシンポジウムで報告した(就実大学吉備地方文化研究所古代地域史フェスタ「西国における宗教の展開」)。

(2)2年目にあたる27年度は昨年度に収集した宇佐八幡宮における陰陽道・陰陽師関係史料をもとに宇佐の陰陽師について考察した。その結果、宇佐八幡宮には遅くとも12世紀末には神職の一員として陰陽師の存在が確認できた。ちなみに『宇佐八幡宮御託宣集』には天長元年(824)に陰陽師川辺勝真苗が認められ、さらに遡る可能性がある。ただし、この点については本史料の史料批判を充分に行った上で判断する必要がある。また、宇佐の陰陽師の特質としては、12世紀末から19世紀中頃まで断続的にその存在が確認できる点があげられる。宇佐の陰陽師は神職に

属し、宇佐の神事・仏事の年中行事への参仕、式年遷宮への参仕のほかに清祓などの呪術も担っていた。また、占いを行っていた可能性もある。

また、27年度の成果として、中津市北原地区で継承されている北原人形芝居（大分県指定無形民俗文化財）との関連が明らかになった点もあげられる。北原人形芝居及び近世の北原散所については論文が複数ある（例えば半田康夫「宇佐放生会の傀儡子」『大分県地方史』6号、1955年、椋田美純「くぐつの系譜・芸能村」『大分県地方史』123号、1986年など）。また、近世の由緒書から北原地区は近世には陰陽師が集住する散所であったことが明らかである。当該地域には鎌倉期に陰陽師の免田が所在しており、宇佐の陰陽師の系譜を引くものと理解して大過ないだろう。このように宇佐八幡宮および宇佐の膝下荘園地域において陰陽師が定住し、古代から近世にいたるまで連続的に存在が確認できる事例は全国的にも稀少であり、陰陽道研究において重要な研究対象となり得るだろう。なお、これらの成果については、2015年度日本宗教史懇話会サマーセミナーにて発表した。

(3)最終年にあたる28年度はこれまで収集した史料をもとに、宇佐八幡宮の諸儀式における陰陽道の役割についてさらに調査を進めた。具体的には式年遷宮における杣始めの儀式と鎮疫祭について調査した。

まず、宇佐八幡宮では元慶4年(880)から33年に一度式年遷宮が行われはじめたが、これによって3ヶ所の杣山が定められた。一之殿は豊前国築城郡伝法寺村(現福岡県築上町大字本庄1641番地)の大楠神社、二之殿は豊前国上毛郡川底村(福岡県豊前市川底)の須佐神社、三之殿は豊前国下毛郡三光村臼杵(大分県中津市三光)の手斧立八幡宮である。一之殿、二之殿ともに楠の巨木が現存し、前者は推定樹齢1900年、後者は1200年とされる。また、一之殿に関わる史料として安政3年(1856)「御杣始之儀絵図」(築上町指定文化財)をみた。ここに宮司や祝大夫と並んで陰陽師が描かれ、その陰陽師が僧形であることを見いだした。これは宇佐地域における仏・陰陽道の習合を考える上で重要な発見である。また、二之殿には「宇佐神宮のお杣始めの掛札及び箱」(豊前市指定有形民俗文化財)が現存する。安政2年の杣始神事において使用された札に神事に参仕する宮行事以下の諸役が記され、陰陽師と権陰陽師が含まれる。裏側に人名が注記してあるそうだが、残念ながら実物を調査するには至らなかった。今後の課題としたい。鎮疫祭は、毎年2月上旬に宇佐八幡宮の祖社とされる薦神社と宇佐八幡宮で行われる疫病祓の祭祀である。『宇佐宮寺年中行事一具勤行次第』『宇佐宮寺年中月並神事』にみえる宮心経会を起源とすると考えられ、中世までは陰陽師も参仕

していたが、現在の鎮疫祭では陰陽師は見られない。

また、本年度の成果としては、陰陽道祭祀の視点から災害について論じた「中世都市鎌倉の災害と疾病」を発表し、風伯祭を事例に中世陰陽道祭祀の特質と神祇・道教との関係を視野に入れた報告を行った。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

赤澤春彦「中世都市鎌倉の災害と疾病」、安田政彦編『自然災害と疾病 生活と文化の歴史学8』竹林舎、査読無、2017、405-430

赤澤春彦「京下りの人々 陰陽師・医師」、五味文彦他編『現代語訳吾妻鏡 別巻 鎌倉時代を探る』吉川弘文館、査読無、2016、148-158

赤澤春彦「鎌倉幕府と陰陽師」、平雅行編『公武権力の変容と仏教界』清文堂、査読無、2014、284-287

赤澤春彦「鎌倉幕府文士論 鎌倉幕府を支える様々な人々」、秋山哲雄・田中大喜・野口華世編『日本中世史入門』勉誠出版、査読無、2014、153-164

赤澤春彦「陰陽道・陰陽師をめぐる研究の新展開」、『歴史評論』776号、査読無、2014年、17-28

[学会発表](計4件)

赤澤春彦「中世における陰陽道祭祀 風伯祭を事例に」、第3回陰陽道史研究の会、2017年3月18日、東京大学史料編纂所(東京都)

赤澤春彦「中世陰陽道研究の覚書」、第1回陰陽道史研究の会、2016年3月19日、大東文化大学大東文化会館(東京都)

赤澤春彦「宇佐の陰陽師」、2015年日本宗教史懇話会サマーセミナー、招待有、2015年8月25日、ホテル三河海陽閣(愛知県)

赤澤春彦「古代・中世の西国と陰陽道」、就実大学吉備地方文化研究所古代地域史フェスタ、招待有、2014年10月18日、就実大学(岡山県)

[図書](計1件)

五味文彦、赤澤春彦他、吉川弘文館、『現代語訳吾妻鏡16 將軍追放』、2015、2-22

6 . 研究組織

(1)研究代表者

赤澤春彦 (AKAZAWA, Haruhiko)

摂南大学・外国語学部・講師

研究者番号：90710559